様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22　年 5 月 17　日現在

研究種目：　若手研究（スタートアップ）
研究期間：2008～2009
課題番号：　20820017
研究課題名（和文）　平安鎌倉期における歌学と仏典注釈の相互交流についての学際的研究
研究課題名（英文）The Interdisciplinary research on mutual exchanges of Kagaku(Classical study of Japanese traditional poetry 'WAKA') Texts and Buddhism Texts in the Heian and Kamakura Periods

研究代表者
岡崎　真紀子　（OKAZAKI MAKIKO）
静岡大学・人文学部・准教授
研究者番号：　30515408

研究成果の概要（和文）：
平安時代から鎌倉時代にかけての時期にしるされた歌学書の叙述と、同じ時期にしるされた仏典の注釈類の叙述との間に、接点が見られることを具体的に検討した。その結果、当時の歌学に、法会の場で語られていた内容や、梵字の音声に関する学問である悉曇学における言語意識などが、深い影響を与えていることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：
The aim of this study is to search a point of contact between Kagaku(Classical study of Japanese traditional poetry'WAKA') texts and religious texts, which were written in the Heian and Kamakura periods. The results of the research proved various relations between both sides. Especially, contents talked in a Buddhist service and idea of language in Shittangaku(Study of the sounds of Sanskrit characters) had a strong impact on the description of contemporary Kagaku.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	1,310,000	393,000	1,703,000
２００９年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
年度			
総　計	2,510,000	753,000	3,263,000

研究分野：中世文学
科研費の分科・細目：文学・日本文学
キーワード：平安時代　鎌倉時代　和歌　歌学　注釈　悉曇

１．研究開始当初の背景

（１）本研究課題の申請時における背景

本研究課題が主として対象とする平安鎌倉期の歌学についての先行研究は、近代以降進められてきた。歌学書の基本的な資料は日本歌学大系（風間書房）や日本古典文学大系（岩波書店）、日本古典文学全集（小学館）などに活字化され、鎌倉後期の『古今和歌集』

注釈書については、片桐洋一編『中世古今集注釈書解題』（赤尾照文堂）や京都大学国語国文資料叢書にある程度活字・影印がある。また、平安後期・鎌倉中期の『万葉集』の注釈書として注目される『秘府本万葉集抄』と仙覚『万葉集註釈』は、冷泉家時雨亭文庫蔵本の公開によって良質な本文を見ることができるようになった。このような基礎文献の整備と連動して、平安鎌倉期の歌学書類は、歌論のみならず雑多な説話類も含む内容もあいまって、和歌研究・説話研究など多様な視点から関心を呼んできた。

とは言え、歌学と仏典注釈の接点を探ろうとする方法からの研究は、いまだ十分なされていないのが、本研究課題申請時における状況であった。ここでいう仏典注釈書類とは、大きく二つの傾向の文献を指す。まず、平安後期の『百座法談聞書抄』『安養集』をはじめとする僧侶の説経・論義など法会の場での口頭の談義を記録した体裁をとる、法華経・浄土教系教典類の注釈類。つぎに、八世紀の安然『悉曇蔵』にはじまり平安後期の明覚『悉曇要決』、鎌倉中期の信範『悉曇秘伝記』へと展開する、悉曇学（古代インドの悉曇文字に関する音韻学的な学問）の書である。上記の文献については、これまで主に日本語学・日本語史の側から着目され、基礎的な研究がすすめられてきた。築島裕氏、小林芳規氏、柳田征司氏らによる訓点語研究、馬淵和夫氏による韻学史研究などが、まず参照すべき大きな功績である。しかしながら、和歌研究の側からこれらの資料にきりこむ研究は、殆どなされていなかった。わずかに仙覚の万葉集研究と悉曇学の関係は大まかに指摘されている。しかし、それとて実証的な探求は手つかずの領域であったと言っていい。

以上のような研究史的な背景をふまえ、本研究課題では、従来の和歌研究が見落としてきた領域に光をあて、新たな研究の視界をきりひらくことを目指そうとしたのである。

（２）本研究課題を着想した動機

研究代表者（岡崎）は、本研究課題を申請する以前においては、平安から鎌倉へ移行する時代の転換期にあたる平安後期（12 世紀）の歌学を中心とする研究をすすめてきた。その研究の過程で、平安後期において、和歌を中心とする和語（やまとことば）の表現領域と、漢籍・仏典の受容を中心とする漢語（仏教語も含む漢字の語彙）の表現領域とが、注釈という営みを介して交流している実態に大きな関心を持った。その典型的な事例が、歌学書の言説と仏典注釈書の言説に繋がりが見られるという現象である。しかし、そうした現象については、きわめて重要な問題をはらんでいるにもかかわらず、先行研究は不十分であり、さらに考究を深める必要性があると考えられた。そこで、２００８年度～２００９年度の研究テーマにおいては、12 世紀だけではなく平安鎌倉期全体（10 世紀～13 世紀）に考察の範囲をひろげて、歌学と仏典注釈を対象とする研究を試みようと着想したのである。

２．研究の目的

本研究課題では、平安鎌倉期の歌学書に記されている叙述と仏典の注釈書に記される叙述との間にどのような接点が見られるかを具体的かつ実証的に検討する。その検討を通して、当時において、和歌を享受する場と仏典を享受する場が相互に交流していた実態を明らかにすることを目的とする。

３．研究の方法

本研究課題の研究方法は、大きく分けて３つの柱から構成される。以下それを、（１）

～（３）として記すこととする。

（１）資料の調査・収集

まず、第一段階として歌学関係の資料、仏典注釈の資料を調査・収集することからはじめた。双方の資料はともに、ある程度基礎的な研究・活字化がすすんでいるが、未調査の文献も伝存する。そこで、調査と写真撮影、紙焼写真、マイクロフィルムの活用などによって、それらの資料の収集につとめた。

（２）歌学書および仏典注釈関連資料の読み込みと考察

ついで、第二段階として、各資料を丹念に読み込んだ。くわえて和歌関係の資料と仏典関係の資料をともに読みこなすための知見と視野を深める研究を重ねた。その際、文学・仏教学など多岐におよぶ領域に学際的に目配りすることを心がけた。

（３）歌学と仏典注釈の交流を証する事例のデータ整理

そして、第三段階として、読み込んだ資料のなかから、歌学書の叙述と、仏典注釈書類の叙述との間に共通点・影響関係が想定される部分を抽出し、分析をくわえたうえで、その用例を整理した。

４．研究成果

（１）研究の主な成果

本研究課題の研究成果を分かりやすく示すために、本報告書の冒頭（１頁）にも掲げた研究成果の概要を改めてここに掲出したうえで、研究成果の詳細について記述することとする。

①研究成果の概要

平安時代から鎌倉時代にかけての時期にしるされた歌学書の叙述と、同じ時期にしるされた仏典の注釈類の叙述との間に、接点が見られることを具体的に検討した。その結果、当時の歌学に、法会の場で語られていた内容や、梵字の音声に関する学問である悉曇学における言語意識などが、深い影響を与えていることが明らかになった。

②研究成果の詳細

平安時代中期以前に成立した『古今和歌集』をはじめとする和歌・歌集は、平安後期から鎌倉時代にかけての時期に至って注釈の対象となり、ここに、和歌についての学書、すなわち歌学書が叢生する時代がおとずれた。歌学の言説には、単に和歌の語句に関わる内容だけではなく、多様な内容が含まれている。とくに、同時代に学僧たちの間で行われていた仏典に関する注釈書・学書の叙述内容と繋がる部分が見受けられる。

和歌は、平安鎌倉期の日本における文学活動の中心であり、人々の美意識を支える基盤にあったと言っていい。しかし従来の研究は、和歌の文学的側面のほうに着目するあまりに、和歌の世界（仮名による詩歌の場）が、じつは僧侶の学問の世界（漢文・梵語・片仮名表記をむねとする硬質な言語の場）とも分かちがたく結びつく側面を持っていたという事実を見過ごしがちであった。そこで、本研究課題では、歌学と仏典注釈の交流という学際的な視野からの考察をすすめ、次のような成果を得た。

まず、平安後期の歌学書、たとえば源俊頼『俊頼髄脳』、藤原範兼『和歌童蒙抄』、藤原清輔『奥義抄』、顕昭『古今集注』などのなかに、歌語を音韻的に解体したうえで語義解釈をつけた説が散見することに注目した。同様の説は、鎌倉期の古今集注釈や仙覚『萬葉集註釈』にも、さらに深化したかたちで見ることができる。そうした歌学書の説を生みだす背後にある歌人たちの思考は、仏教の悉曇学との関わりがなくしては生まれてこないものではないか。そのような作業仮定のもと、平安後期に記された悉曇学書である明覚『悉

曇要決』や、明覚の先達である安然『悉曇蔵』などに着目し、それらと歌学書の記述との比較検討をおこなった。その結果、両者にあらわれる言語意識には、通底するものがあることが明らかになった。

次に、平安後期から鎌倉期に成立した歌学書に記されている説話のなかに、仏典注釈の叙述と質的に似通うものが見出されることに注目した。そこで、『百座法談聞書抄』『安養集』『金澤文庫本仏教説話集』などといった、法会の場での口頭の談義を記録した体裁をとる仏典注釈類や、真福寺蔵の仏伝類（『中世仏伝集』所収）などに目を向け、歌学書の叙述との比較検討をおこなった。その結果、法会の場で語られていたことばと、歌学書にしるされる叙述の間に、直接ないしは間接的な繋がりがあると想定できるのではないかという見通しを得ることができた。なお、その成果の一部は、本研究課題の進行期間内である２００８年１２月に刊行した著書、『やまとことば表現論―源俊頼へ』に生かすことができた。また、論文「「まがよふ」「もごよふ」考―『散木奇歌集』の本文」や、研究発表「皇女・歌詠・法文―『発心和歌集』をめぐって」も、この研究課題によって得られた知見に関わる成果である。

（２）得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

これまでの研究においては、仏典の注釈書類、悉曇学の文献類は、日本語学の訓点資料・音韻史資料としての重視されることが多かった。本研究課題では、それらの文献に見られる叙述内容・考え方が、実は和歌の注釈学と密接な接点を持っているということを具体的に明らかにした。それは、語学・文学の双方に対して目配りした、学際的な研究実践であり、従来の和歌研究にはない成果であると位置づけられる。

また、歌学と仏典注釈の相互交流を探求した本研究課題は、和歌に対する読みを、表現分析・作品鑑賞といった文芸的手法から一旦解き放って、同時代にいきづいていた仏典享受との関わりから捉え返す考察にほかならなかった。その成果は、和歌研究の側にも仏教学研究の側にも、一定のインパクトを与え得るものであったと考える。

なお、近年海外においても、欧米の研究者を中心に、日本の古典文学を「注釈書」に着目する観点からとらえることへの関心が近年高まっている。それは、古典テクストを作品論的に鑑賞することよりも、そのテクストがいかに読まれてきたのかを読者論（享受論）的観点から考察することへと、文学研究自体の方法が移行してきた大きな潮流と連動していると考えられる。本研究課題の切り口は、そうした潮流とも呼応している。従って、国外の日本研究にもリンクできる成果となったと位置づけられるのではないだろうか。

（３）今後の展望

この研究課題を進めたことによって、平安時代から鎌倉時代にかけての歌学書と仏典注釈の間の相互交流のありようについて、だいたい見通しをつけることができた。その考察の過程で、とくに鎌倉中期の古典注釈が重要だと痛感し、より掘り下げて検討する必要があると考えている。鎌倉中期の歌学書類には、同時代に成った源氏物語注釈や仏典注釈・悉曇学書と通底する注釈方法や思想がとくに認められるからだ。また、文永・弘安の役（蒙古襲来）による対外的な危機意識が高まった時代の風潮を反映してか、我が国日本の言語のあり方に対する自覚的な言及も、共通して現れており、注目される。そこで今後の研究においては、本研究課題で得られた成果を踏まえたうえで、考察する時代の範囲を

鎌倉中期に絞り、注釈言説をジャンル横断的に検討して、そこに現れる言語意識を明らかにしたいと考えている。幸い、平成 22 年度より、新規の科学研究費補助金（若手研究Ｂ）の研究課題として、「鎌倉中期の古典注釈に現れる言語意識についての総合的研究」（平成 22～24 年度）を申請し、採用が内定した。今後は、上記の研究にとりくんでゆきたいと考えている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
①岡崎真紀子、「まがよふ」「もごよふ」考―『散木奇歌集』の本文、国文研ニューズ、査読無、No,17、2009、7-7

〔学会発表〕（計１件）
①岡崎真紀子、皇女・歌詠・法文―『発心和歌集』をめぐって、物語研究会、2010 年 3 月 20 日、明治大学

〔図書〕（計１件）
①岡崎真紀子、やまとことば表現論―源俊頼へ、笠間書院、2008、449 頁

６．研究組織
(1)研究代表者
岡崎真紀子（OKAZAKI MAKIKO）
静岡大学・人文学部・准教授
研究者番号：30515408